

## 短歌をひろげる 屋良健一郎

「短歌研究」二月号の特集は「ひろがる短歌」。千葉聡「歌人の枠を超えて」は穂村弘、東直子をはじめ、作歌以外でも幅広く活躍する歌人を紹介する。小説やエッセイといったジャンルで活躍する人が増えていることに気付かされる。千葉は「私があるものだと思いついて『歌人の枠』など、もともとなかったのかもしれない」と述べ、「今後もさまざまな歌人が、思ってもみなかったような場所に出かけていき、大冒険をするだろう」と期待を寄せる。千葉の文章からは、歌人たちが広く認知されることへの喜びと、現代短歌が広まって欲しいという願いが感じられる。

千葉自身も読者を魅了するエッセイの書き手で、昨年はエッセイと短歌を取めた『短歌は最強アイテム』（岩波書店）を出版した。職場である学校現場の様子を記した一冊。自身の失敗やかっこ悪いところも記されており、人間味あふれる、体温を感じさせる著書になっている。エッセイの合間に、内容と関連する現代短歌の作品が挟まれているが、歌の鑑賞・解説をするわけではない。読者を歌の前まで誘導し、あとは読者に任せるそのスタイルが、エッセイと歌の双方に膨らみを生んでいる。そして、歌を紹介する、歌の前まで誘導する、ということの大切さを思う。

私自身も、短歌がもつと多くの人に読まれて欲しいと願う。私を担当している大学の講義の中で、一回は現代短歌を扱うことに

している。講義の感想を見ると、紹介された短歌に共感したり、興味を持ってくれたりといったものが多いが、「短歌は難しい」「何を言っているのか分からない」というのも散見される。実作者であり、短歌を読み慣れている私にとつて違和感のないような言葉の使い方や飛躍の仕方、短歌に触れる機会がない人にはすんなりとは受け入れがたいのだ。また、「短歌」というだけで「難しい」と読む者を身構えさせてしまうような何かがあるような気がする。

「短歌研究」で千葉が紹介したような「大冒険」を志す歌人たちが、短歌への近寄りがたさを薄めてくれるのかもしれない。二〇一七年二月に名城大学で「現代短歌の世界」という講座を実施し、穂村弘に講師をお願いした。沖縄県内では短歌関係のイベントにはだいたいの同じ人が集う傾向が強いのだが、この時は穂村のエッセイのファンの人達も参加しており、いつもとはまた違う雰囲気であった。そういえば、大学院生の頃、先輩が柘野浩一の小説『ショートソング』を原作とした漫画を読んで、短歌を作り始めるということもあった。他ジャンルで活躍する歌人たちが、読者を短歌の世界の入り口に誘ってくれる。そうして生まれた短歌への興味を一過性のもので終わらせず、よみ（読み／詠み）続けてもらうためにはどうすればいいのか。「短歌研究」の三浦しをんと東直子の対談、寺井龍哉の論考で歌会について触れられている。永田和宏・知花くらら『あなたと短歌』（朝日新聞出版）は対談形式で展開される入門書で、知花が「塔」の歌会に参加した時の様子も収録されている。歌会の果たす役割、在り方を考えることも短歌をひろげる上で重要なことのように思われる。